

コロナ禍の中、「気づき」「考え」「実行する」児童生徒等の紹介します

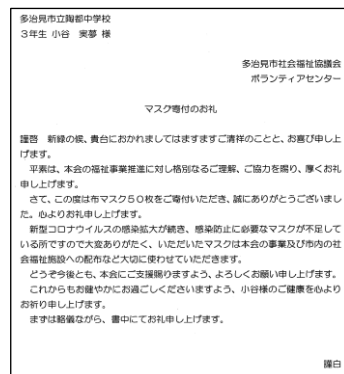
青少年赤十字の推進につきましては、平素から格別のご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、コロナ禍の中、JRC加盟校の皆さんが周囲の様々な問題に「気づき」、自分が問題解決のために何が出来ることを「考え」、自分から進んで人の役に立とうと「実行」できた姿を報告していただきましたので、紹介をさせていただきます。

① マスクを作って寄贈した実践

多治見市立陶都中学校の小谷実夢さん(中3)は、「自分に出来ることで、周りの人たちを支えよう。」という気持ちで手作りマスクを作ったそうです。

作った50枚のマスクは、使う人のことを考えて、サイズが分かるようにした上で、一つ一つ丁寧に包装して、多治見市の社会福祉協議会に寄贈されたそうです。



羽島郡笠松町立松枝小学校の榎野祥瑚くん(小4)、楓夏さん(小3)、真奈美様(母)の3人は、人のために何か役に立つことをしたいということを考え、学校が休業中に手作りマスクを50枚作って、学校の先生方に寄贈されたそうです。

マスクを受け取った先生方は、この素晴らしい取組に感激をされ、ゴールデンウィーク中に先生方も手作りマスクを作り、学童クラブの指導員の皆さんに寄付する活動に繋がったそうです。

各務原市立稲羽西小学校の草分こはるさん(小6)と明直くん(小4)の二人が、学校休業中に作った手作りマスクを地域のデイサービスへ寄付しました。

デイサービスから感謝状がとどきました。



美濃加茂市立古井小学校の卒業生の山口天衣和さん(中1)は、臨時休業期間中に自分に何が出来るかを考え、マスク不足を心配し、新1年生のためにマスクを作ることを決めました。自宅に余っていた布を使い、約1カ月間をかけて、一人でこつこつ手作りして、150枚のマスクを寄贈しました。

この手作りマスクは、4月7日の入学式後に新1年生に配付され、現在も大切に使われているそうです。



② 『ウイルスの次にやってくるもの』を視聴して

安八郡神戸町立下宮小学校では、2年生以上の児童が『ウイルスの次にやってくるもの』を視聴しました。授業後には、「自分に今できることは、医療関係者に迷惑をかけないために、感染予防をすることだと思います。」「感染した人に対して差別したり、嫌悪感をもったりしないようにすることが大切だと思います。」といった感想をもちました。



加茂郡七宗町立神淵小学校では、日本赤十字社制作の『ウイルスの次にやってくるもの (YouTube)』を使って4～6年生の児童が、差別を生まないことやお互いをいたわりあうことを学習しました。

新型コロナウイルスは怖いけれど正しく恐れて、みんなで乗り越えることができるようにお互いを大切にいたわりあいながら終息まで歩んでいきたいです。



不破郡垂井町立不破中学校では、日赤が制作した「ウイルスの次にやってくるもの」を使って、公正・公平や人権などについて生徒の皆さんと考える授業を行っていただきました。

①生徒に指導を行うため、先生方が事前に研修を行い、指導内容についての共通理解を図られました。

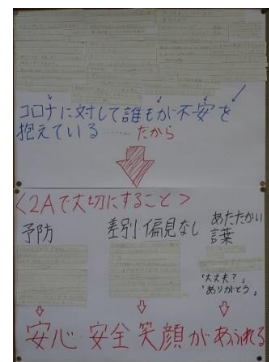
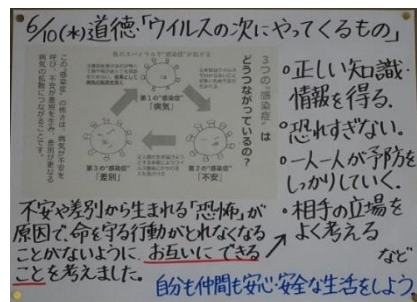


②右下は、実際の授業中の風景です。
生徒の皆さんが、画面に集中している様子がうかがえます。



③下図は、授業の中で生徒の皆さんが出し合った考えをまとめられたものです。

生徒の皆さんは、主体的に自分の考えを出し、お互いの考えを知ることによって、新型コロナウイルス禍における人権意識について深い学びができたのではないのでしょうか。



※YouTube『ウイルスの次にやってくるもの』の映像が必要であればご連絡ください。

③ コロナウイルス感染拡大のための環境整備（実践例）

青少年赤十字に新規加盟したときに寄贈させていただいたテントを、コロナウイルス拡大防止のために有効に活用していただいております。

恵那市立恵那西中学校においては、テントの周りを風通しのよい遮熱カーテンで囲い、検温場所や待機場所としてテントを活用されているそうです。



各務原市立稲羽西小学校においては、日差しを遮断して「熱中症対策」、雨が降っても濡れない「梅雨対策」をしながら、新型コロナウイルス感染予防の手洗い場用にテントを活用されているそうです。

寄贈させていただいたテントも有効に活用していただけているようでとても嬉しく思っています。



まだまだ素晴らしい児童生徒の姿や学校の取組があると思います。当支部に情報をお寄せ頂ければ、ホームページや広報誌等に掲載し、県内の皆さんに広く紹介させていただきたいと考えておりますので、ご協力をよろしくお願いいたします。